

関わりを生み出す活動のあり方

—複式低学年「みんなであそぼう」の実践から—

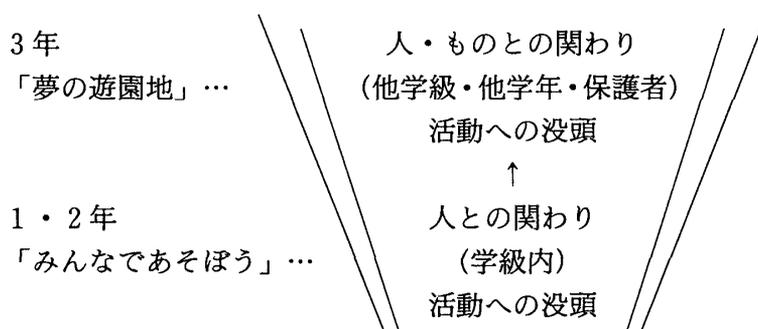
佐 和 真由美

1 はじめに

目まぐるしく変化していく社会の中で日々生活している私たちは、多くの人と関わって何かをしたり、自分自身をじっくりとみつめたり、飽きることなく物事に組み組んだりすることが少なくなってきたのを感じる。それは、同じ環境の中で生きている子どもたちにも言えるのではないだろうか。ではなぜ、人やものとの関わりが大切なのであろうか。今の子どもたちは、たくさんの情報や知識を得ることができる。それらを、自分の人生をより豊かにするために使いこなすには、判断力や思考力が必要となる。そういった力は、たくさんの感覚を伴った豊かな体験から生まれてくると言われている。だからこそ、子どもたちがより多くの人やものとの関わる場を考えた時、身近な友達との関わり合いを深める「遊び」からスタートすることにした。

2 「みんなであそぼう」の実践から

(1) 本主題の位置づけ



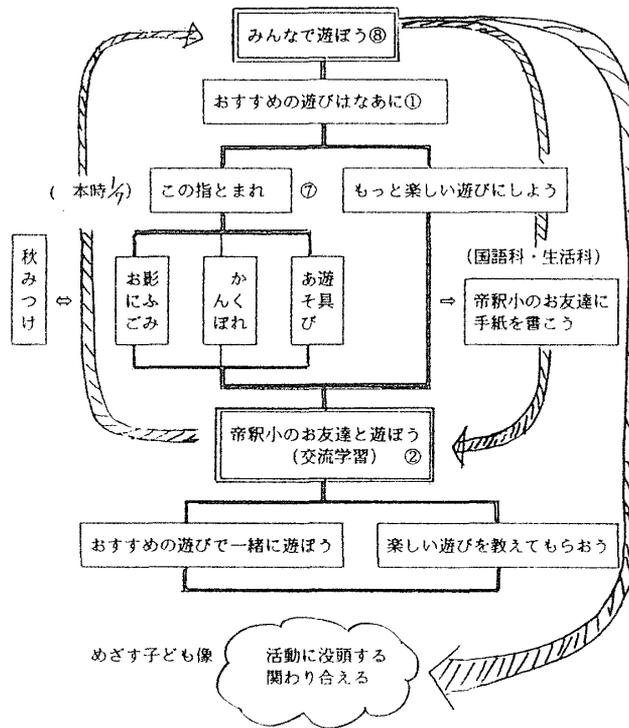
(2) 主題について

「遊び」という言葉からは、思わず体を動かしたくなる、わくわくする楽しさが伝わってくる。それは、遊びの中で自由に自分の思いを出すことができ、失敗から笑いが生まれたり、他の新しい遊びにつながったりと、どこまでも活動の楽しさが続いていくからだと思われる。遊びを通して関わり合う友達が多いほど、お互いの思いが一致したりぶつかったりする機会を得ることができ、いつの間にか他者と関わり合う楽しさや関わり合い方をも学ぶことができるだろう。また、たくさんの笑い声や驚きの声に包まれて、さまざまなことを体験し、発見し、次の活動への原動力ともなる満足感を得られるだろう。そして、この一連の遊びの中で培った力が、子どもの学校でのいろいろな人間関係を豊かなものにしていくだろうと考えた。

(3) 活動のねらい

- 身近な人と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができる。
- 他校のお友達と一緒に活動する楽しさを味わうことができる。

(4) 活動内容と計画 (全10時間)



(5) みんなで遊ぼう～おにごっこ～

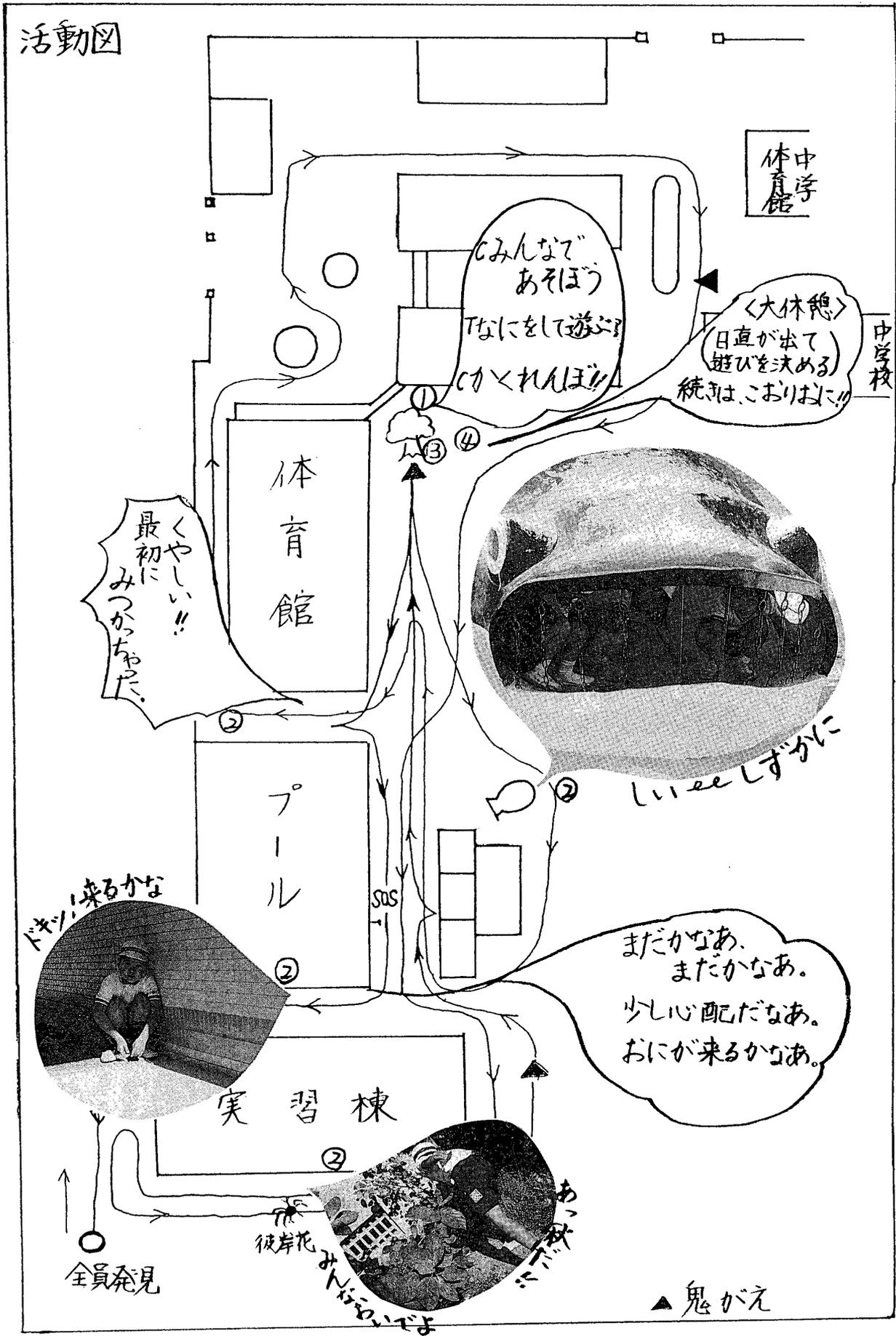
① 本時のねらい

- 友達と進んで遊ぼうとする意欲をもつことができる。

② 活動の展開

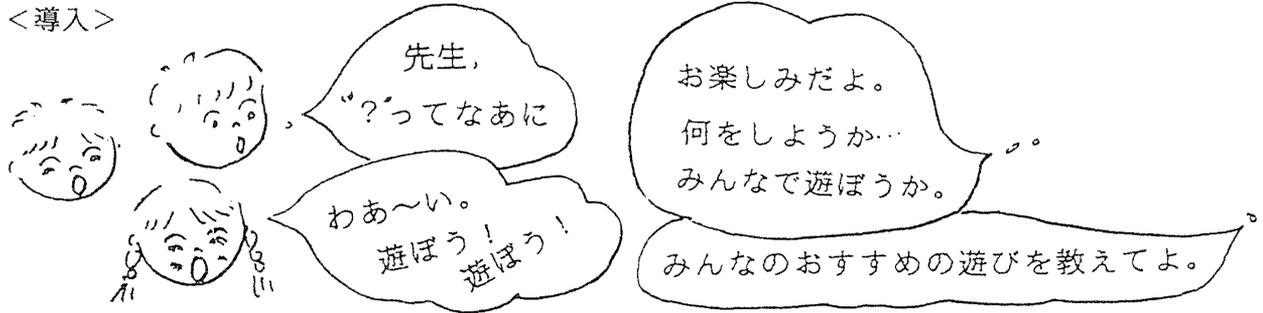
学 習 活 動	この活動に期待すること	教 師 の 働 き かけ
<p>○ みんなで遊ぼう</p> <p>今日のおすすめの遊びは、～にしようよ。</p> <p>○ さあ、遊ぼう～この指とまれ</p> <p>楽しいな。自分が鬼になりたいな。</p> <p>ごっつんこしていやだな。もっとやろうよ。</p> <p>○ ティータイム</p> <p>風が気持ちいいね。</p> <p>ここが楽しかったよ。ぼく、こうの方がよかったな。</p> <p>○ 遊んでみようよ</p> <p>もう一回やってみようか。</p>	<p>活動への没頭</p> <p>人との関わり</p> <p>満足感</p> <p>他者の思いへの気づき</p> <p>活動への意欲</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時の遊びの楽しさを思い出せるようにしていく。 ・ みんなで遊ぶという雰囲気を作るために、教師も一緒になって遊ぶようにする。 ・ 遊びに夢中になるほどめめることも予想されるが、子ども達自身が次の活動へ続けていくよい機会なので、教師は見守るように心がける。 ・ 木陰で休み、ゆったりとした気持ちで遊びを振り返られるようにする。 ・ ひとつの遊びをどんどん広げていくおもしろさを味わえるように、時間があれば、出てきた工夫を加えて遊ぶようにする。

活動図



③ 活動の実際

<導入>



次々に出てくる遊びに、どの子も大喜びで「知ってるよ。」「知らない。どんな遊びなの。」と教え合った。今日のおすすめは、全員一致で騎馬戦（帽子とり鬼ごっこ）に決まり、みんなで運動場に飛び出した。発表が続きわずか10分程度の遊び時間となったが、運動場を駆け回った。「強くタッチされて痛かったからやりたくない。」という子が出たが、「もっと軽くしよう。私も痛かったもの。」「アウトになってもまたできるように、鬼とジャンケンしよう。」と自分たちで考えて新しくルールをつけ加えていた。教室に帰りながら「また今度も?があるといいね。」と話し合っていた。

<本時の活動> 朝の会～みんなで遊ぼう～帰りの会

朝の会で、今日の目標は「?がおすすめの遊びだったら、みんなで楽しく遊みましょう。」に決まった。みんなで遊ぶことへの子どもたちの期待の高さを感じた。

前時での遊び時間が少なかったので、本時ではたっぷり遊ぶ時間を確保するように心がけた。大きな木の下で活動をスタートし（前ページの活動図①）、3回鬼ごっこを繰り返した（②）。この間、鬼に見つかっても逃げ続けたり、隠れる時間が無くすぐに見つかったり、見つかった子が鬼と共に見つけに行ったり、最後のSOSが出るまで隠れ続けたりと、さまざまな子どもの姿が見られた。

そのうちに、小さな1年生が息を切らし始めたので、ティータイムを取った（③）。ここでは、活動の振り返りをし、子どもたちの抱いたいろいろな気持ちや関わり方に気づくことをねらいとしている。しかし、本時は遊びの楽しさを感じ取ることを大切にしたいと考え、お茶を飲んでゆっくり過ごした。そして、大休憩に入ったので、その後の遊びを子どもたちだけに委ねたところ（④）、16名中13名が、こおりおにをして遊んでいた。

帰りの会で、今日の目標の反省が本時の振り返りとなった。全員が「楽しかった。」という感想だったが、その内容は、「楽しくて興奮をしてこけたけど」「ちょっとルール違反をしてだめだったけど」「見つけられて悔しかったけど、隠れんぼだから」楽しかった、とさまざまであった。日直の「?は、これからも楽しいことがあるので、期待しましょう。」に全員がにっこりと大きな声で「はい。」と応えていた。

「2じかんめの?」

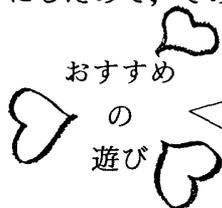
きょう、2じかんめにふくていのみんなで、かくれんぼをして、1かいめに、すぐYちゃんとSくんとわたしがどうじにみつかったかなしいし、ほかもまたぜんぶ、すぐにみつかったから、かなしかったです。でも、とてもたのしかったです。

2ねんせいはいしがはやいからみつきりにくいけど、1ねんせいはまだまだおそいからかくれるのがたいへんだけど、たのしくできました。わたしは、2ねんせいになったら、2ねんせいよりもはやくなるのかなあ?ととちゅうおもいました。またやりたいです。 (日記)

これまで全員で遊ぶことがなかった子どもたちが、25分近くも鬼ごっこを続け、帰りの会の振り返りからも、遊びの楽しさを感じ次の時間を楽しみにしていることが分かった。このことから、以後も進んでみんなと遊んでいく意欲がもてたと考えられる。

(6) みんなで遊ぼう～スーパードッジ～

みんなで遊び始めてから、おすすめの遊びが増えてきた。移動黒板に自由に書き込んでいくことにしたので、その黒板を前に、休憩時間になるとわいわいがやがや話が弾んでいた。



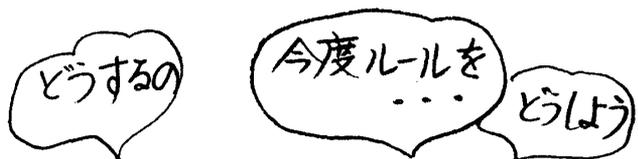
おととつと・おしくらまんじゅう・くるくるタッチ・スーパードッジ
田んぼ・こおりおに・かくれんぼ・しりずもう・ダブルダブルドッジ
せんじゃんけん・きばせん・かかしナンバーワン・ひょうたんおに など

雨上がりのぬかるみの日、室内で遊ぶか外で遊ぶか、日直の司会のもとで話し合いが続き、今日のおすすめは、外でのスーパードッジに決まった。ドッジボールでも、ボールを2個に増やすだけで、どこから飛んでくるかわからないスピード感のあるスーパードッジに変身している。気乗りのしない友達に熱心におもしろさを伝える姿から、運動場で見かけた遊びをまねていても、自分たちが名づけた遊びは、自分たちだけの特別な遊びになっているのが分かった。

スーパードッジをするうちに、「線を踏んだ。当たった。当たってない。」ともめ始め、教師に仲裁を求めてきた。「？」の当初は、時間の確保と遊びにみんなを引き込むことをねらって、教師がガキ大将的にリードをしてきた。しかし、おすすめの遊びをめぐる話し合いが長引いても遊ぶことを面倒臭がったり、身を引いたりすることがなくなってきたので、全て子どもたちに任せてみた。

すると、日直が司会を始め、輪になって話し合い始めた。本気でドッジにのめり込んでいたので、普段「僕は、べつにどっちでもいい。」と言っているA君が大声で「それは、ずるい。おかしいよ。」と言い、一步も引かない。B子も同じである。周りの子どもチームに分かれて言い合いをしている。この時、どうするのかと言う視線を日直が集めた。普段A君と仲のいい子だが「今日は、はっきりとルールを決めていなかったのだから、A君の言うのもBさんの言うのもどっちにも決められません。今は、もう時間がないのでこのままのルールでいって、今度、今日の遊び方を変えるかどうか話し合います。」とはっきりと言ったので、みんなも納得してドッジを続けることができた。「ルールは、みんなで決めないともめる元になって楽しく遊べないから」だそうである。B子の日記からは、楽しくて心弾むからこそ自分の思いが出て、もめることになったのだと分かる。

遊びを決める時や途中での話し合いの様子から、どの子ども、自分の事として考えようとしているのが分かる。それは、みんなで遊ぶとお互いが



「スーパードッジ」

わたしは、1時間目に?でスーパードッジにきまって外に出ました。丸い線を引いて女の子たい男の子でドッジをしました。男の子は1回せんでまけました。2回せんは、どうてんでした。とてもうきうきしました。

(B子の日記)

主張し合ってもめることもあるが、その分楽しいことも多いということを少しずつ体験してきたからであろう。また、みんなが夢中で遊んでいる時に、たとえ仲良しであってもルールの決定は公平でなければならないということも、自然に学び取ってきている。

(7) いっしょに遊ぼう～帝釈小のお友達と～

10月下旬、帝釈小学校との交流学習として、宿泊学習に出かけた。子どもたちは、あきぐみから実を採って食べたり、木に登ったりと、日頃の生活では味わえない遊びをすることができた。また、校庭の遊具にも関心を示して、次の日に遊んで確かめていた。そして、色おにや影ふみをしていっしょに遊ぶ中で、自分たちや学校の環境と比べて考えていた。

2回のテレビ電話による交流では、木から採って食べ、種をとばしたあきぐみのことや、いろいろな思いを抱いた遊びのことを質問していた。これは、自分の身体や五感を通して感じ取ったことが印象に残ったからであろう。

「帝釈小のお友達が遊びに来てくれる時には、あきぐみの木はないけれど、東雲小にもおすすめの場所や遊びがあることを教えてあげたい。そして一緒に遊ぶんだ。」という言葉に、遊びの輪をもっと広げていきたいという意欲を感じた。

3 おわりに

ただ「遊ぶ」ということからスタートした。それは、子どもたちが楽しく遊ぶことで、最も身近な友達との関わり合いを深めるようになれば、喜怒哀楽のあふれる生き生きとした学校生活が送られると考えたからである。自分の身体と心を通した経験（遊び）は、自分で考え、判断し、行動していくための土台となると言ってもよいだろう。

集団で遊ぶ経験の少ない子どもたちにとっては、「遊び」がさせられるものではなく、したいものでなければ続かないと考え、振り返りのティータイムを、はじめは文字通りお茶の時間でよいと考えた。お茶を飲む子もいれば、違う場所に行く子もいてもよいと考え、できるだけ遊びのくつろいだ気分を持続させ、楽しさを味わえるようにしていった。また、遊びでは、教師がリードして十分に遊びを楽しめるように働きかけていった。こうして、子どもたちがみんなで遊ぶ楽しさを感じ始めると、途中でもめてもルールを作って遊び直したり、自分たちだけで話し合いをしたりするようになり、こういった場でも自分のこととして関わり合えるようになってきた。また、ティータイムが振り返りの場となってからは、楽しいという言葉だけでなく、ドキドキした、うきうきした、悲しかった、いやだったなどとたくさんの言葉でその時の気持ちが語られるようになった。それらの言葉を聞きながら、友達の表情にじっと見入る子ども達の姿が印象的であった。お楽しみの「？」の時間は、その度にその日の目標となる。最初「期待しましょう。楽しみましょう。」であったものが、「楽しく遊ぶためにわがままを言わないようにしましょう。」と変わっていった。前の遊びでの経験から、どう自分を表現していったらよいのかを学んでいくのだと言えるだろう。

しかし、帝釈小学校との交流では、「こんなことを話したい。一緒に遊びたい」と思っているも初めて出会った友達なので積極的に話しかけたり、活動に誘ったりということがまだできにくかった。このことから、本主題が中学年へと受け継がれ、自分たちの小集団からしだいに大きな異なる集団の中で、どう自分を表現し、どう他者と関わっていくのかを学びとっていくことは、この子どもたちにとって必要なことだと思われる。

これからも、子どもたちの状態をしっかりと見取り、マンネリに陥らないようにティータイムを充実させていきながら、子どもたちが喜ぶ「？」の時間が、子どもたちの学校での人間関係をより豊かにしていけるように実践を積み重ねていきたい。